

Title	不動明王と毘沙門天を脇侍とする尊像構成について： 法華経信仰との関わりを中心に
Sub Title	A study of the combination of Fudō Myō'ō and Bishamonten as attendants on their relation to Lotus Sutra doctrines
Author	米沢 玲(Maizawa, Rei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.148 (2021. 10) ,p.251- 267
JaLC DOI	
Abstract	Fudō Myō'ō and Bishamonten are accepted as a pair of attendants flanking various deities, especially in Tendai Temples. It has been pointed out that Fudō Myō'ō and Bishamonten have the role of getting rid of evil spirits at the time of death, or guiding prayers for the deceased to the Pure Land. This paper points out that the combination of Fudō Myō'ō and Bishamonten is related to Lotus Sutra doctrines through an analysis of the Biographies of People who Attained Birth in the Pure Land compiled in the Heian period. In addition, this paper focuses on Bronze Plaques Engraved with the Lotus Sutra and Bronze Case Excavated from Mt. Kubote, and Seated Amida Nyorai with Attendants, to argue that these works are also related to Lotus Sutra doctrines. Several examples of statues of Amida Nyorai as the central deity flanked by Fudō Myō'ō and Bishamonten as its attendants existed in the Eastern Tōgoku area during the early Kamakura period. By analyzing them this paper sheds light on their religious context.
Notes	特集：林温教授 退職記念号 図削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000148-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

不動明王と毘沙門天を脇侍とする 尊像構成について

—法華經信仰との関わりを中心に—

米 沢

玲*

A Study of the Combination of Fudō Myō'ō and Bishamonten as Attendants On their Relation to *Lotus Sutra* Doctrines

Rei Maizawa

Fudō Myō'ō and Bishamonten are accepted as a pair of attendants flanking various deities, especially in Tendai Temples. It has been pointed out that Fudō Myō'ō and Bishamonten have the role of getting rid of evil spirits at the time of death, or guiding prayers for the deceased to the Pure Land. This paper points out that the combination of Fudō Myō'ō and Bishamonten is related to *Lotus Sutra* doctrines through an analysis of the *Biographies of People who Attained Birth in the Pure Land* compiled in the Heian period. In addition, this paper focuses on *Bronze Plaques Engraved with the Lotus Sutra and Bronze Case Excavated from Mt. Kubote*, and *Seated Amida Nyorai with Attendants*, to argue that these works are also related to *Lotus Sutra* doctrines. Several examples of statues of Amida Nyorai as the central deity flanked by Fudō Myō'ō and Bishamonten as its attendants existed in the Eastern Tōgoku area during the early Kamakura period. By analyzing them this paper sheds light on their religious context.

* 東京文化財研究所

はじめに

不動明王と毘沙門天は、天台宗に起源を持つ一対の脇侍像として流布し、様々な中尊にしたがう作例が古代から中世にかけて制作された。この二尊を組み合わせることについての典拠は明確ではないが、近年の研究で臨終に際して往生者を守護する役割を担っていたことが指摘されている。本稿では、脇侍としての不動・毘沙門という組み合わせについて、その概要を確認し先行研究を踏まえた上で往生伝や作例の検証を行い、法華經信仰との関わりを考察する。とりわけ阿弥陀如来を中尊として不動・毘沙門をしたがえる尊像構成は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて東国地方で御家人を願主として制作された作例のいくつかに認められるが、これらの作例の制作背景を今後検討していくための手がかりとして、本稿ではまず脇侍に関わる問題を整理したい。

一.

すでに先学が指摘する通り、不動明王と毘沙門天とを組み合わせる脇侍とすることを説く儀軌や経典は存在せず、比叡山横川の根本観音堂に安置された諸尊にその起源を持つとされる¹。『山門同舎記』や『叡岳要記』によれば、承和14年(847)、唐から帰国する途中で海難に遭った慈覚大師円仁(794~864)が観音力を念じたところ、毘沙門天を感得して風が収まり、帰山した後に堂宇を建立し観音・毘沙門の二尊を祀ったという。さらにその後、天延3年(975)に慈恵大師良源(912~985)が不動明王を加えて成立したのが観音菩薩・不動明王・毘沙門天の三尊構成とされている²。これらの記録は伝承の域をでないが、横川中堂には本尊として聖観音立像が伝わっており、昭和に雷火によって焼失したものの脇侍として不動明王立像と毘沙門天立像がともに安置されていた³。当初像が記録通りに円仁や良源によって安置されたものであるかは不明だが、不動・毘沙門を脇侍としてしたがえる尊像構成は平安時代以降に広まりを見せていき、その源

流が横川の根本中堂であるならば天台宗を中心に強い影響力を持っていた可能性は高いであろう。不動明王と毘沙門天が一对となる作例を網羅的に収集した宮本忠雄の研究によれば、はじめは横川中堂と同じく聖観音の脇侍として流布し、次第に千手や十一面など他の観音像に付随する形式が成立したという。さらに、この二尊が一组で「天台の脇侍」として認識されるようになり、多様な中尊、すなわち薬師、阿弥陀、弥勒、釈迦、地藏、文殊、弁財天などにしたがう尊像構成が考案されたものと考察している⁴。不動・毘沙門が一对の脇侍像として幅広く受容された理由にはより詳細な検討が必要だが⁵、宮本は阿弥陀如来にこの二尊がしたがう形式について、円仁の常行三昧堂に始まる天台浄土教との関わりを挙げている。その遺品として代表的な 13 世紀初めの京都・安楽寿院の阿弥陀聖衆来迎図（插图 1）は、画面の中央に西方極楽浄土から臨終者のもとへ来迎する阿弥陀如来と七菩薩を描き、その左右に不動明王と毘沙門天が配された構図で、二尊が往生に際しての守護を担っているとの指摘があり、この尊像構成に往生思想との関わりが深いことが想定できる⁶。

前述したように近年、不動明王と毘沙門天の二尊の組み合わせが臨終に際して往生者を守護する性格や機能を持つということが、往生伝等の記述から検証されている。奥健夫は立像の不動彫像の早い作例として総持寺像を、高橋沙矢佳は阿弥陀如来坐像と不動三尊立像・毘沙門天立像から構成される運慶作願成就院諸像をそれぞれ検討する論考において、二尊の役割を論じている⁷。以下、不動明王・毘沙門天それぞれに関して、往生伝の記述を確認しながら検討を加えていきたい。

二.

奥健夫は長久年間（1040～1044）頃に成立した『大日本国法華経験記』に相応和尚（831～918）が不動によって兜率天に昇る話や（巻上 5「観山無動寺相応和尚」）、源諸時（1077～1136）の『長秋記』に見える三井寺行

不動明王と毘沙門天を脇侍とする尊像構成について



挿図1 安楽寿院 阿弥陀聖衆来迎図

尊僧正による不動祈念の記事等から、不動明王が異界への導き手として認識されていたことを検証し、さらに往生伝の記述からは臨終時に魔縁を退散させる役割が期待されていたと論じている。また、高橋沙矢佳は、不動明王がそもそもは真言行者の守護であったことを踏まえて、覚鑑（1095～1143）『不動講秘式』に、臨終に際して魔縁の退散を不動明王に祈念するとの記述があることを挙げ、往生の守護者という役割を指摘している⁸。指摘されるように、往生伝の類には往生者が不動明王を祈念していたという説話が少なからず見受けられる。このような信仰がいつ頃成立したのかは不明だが、たとえば慶滋保胤（?～1002）撰『日本往生極楽記』には、幼少期より阿弥陀の念仏を唱えて不動尊に帰依していた梵釈寺の兼算が、弥陀念仏を唱えて定印を結んだまま臨終を迎えたという話が載せられている

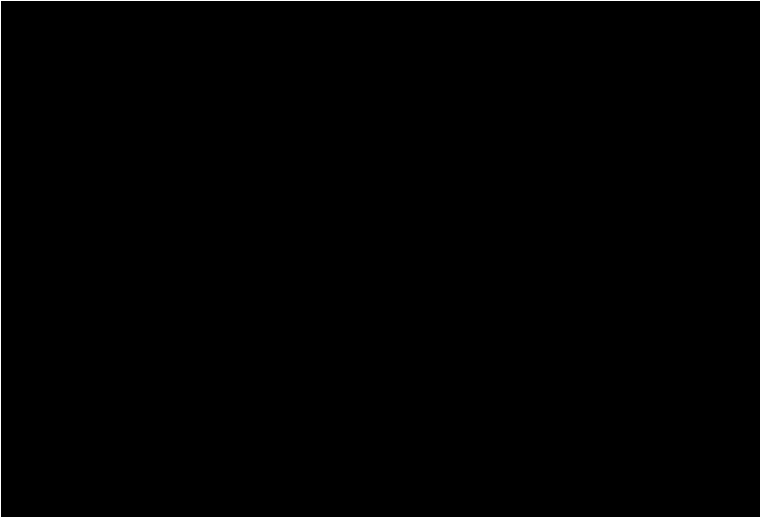
(13「僧兼算」)⁹。また、横川・楞嚴院で寛和2年(986)に結成された念仏結社の過去帳『楞嚴院二十五三昧過去帳』によれば、寛弘8年(1011)正月に没した良運阿闍梨は不動法を修していたといい、ある人の夢中において、阿闍梨が病の折には極楽に往生することが、没した後には兜率天に往生したことが告げられたという¹⁰。このような記事からは、不動明王と往生者との関わりが10世紀末から11世紀には生じていたことがうかがえる。さらに、修験道の教書である『両峯問答秘抄』には「三井往生伝云」として、永久4年(1116)に没した大僧正増誉が修法の終わりには必ず不動明王の名前を唱えて極楽往生を念じ、臨終に際しては特に阿弥陀と不動の尊像を礼拝して遷化したとの記事があり¹¹、この頃には極楽往生そのものを祈念する対象として不動明王が信仰されていることが分かる。

ところで、往生伝の記述をいくつか検討していくと、不動明王に対する祈念に加えて、阿弥陀仏への信仰(『往生極楽記』兼算伝、『拾遺往生伝』平時範伝、『両峯問答秘抄』大僧正増誉伝)、法華經の読誦(『法華驗記』相応和尚伝、長円法師伝、『拾遺往生伝』平時範伝)、兜率天往生(『法華驗記』相応和尚伝、『拾遺往生伝』平時範伝、『楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』良運阿闍梨)など、いくつか共通する事項が認められる。とりわけ法華經との関わりを見てみると、『法華驗記』の相応和尚は「未得読誦妙法華經」という理由から不動明王に伴われて昇った兜率天で内院に入らず、長円法師は法華經の功德と明王の加護によってさまざまな奇瑞に遭遇するなど(巻下92「長円法師」)、両者の強い結びつきをうかがうことができる¹²。後述するように、このような法華經との結びつきは毘沙門天の性格にも見出せるもので、二尊が往生者の守護を担うようになる過程に関わるものかと思われる。

不動明王が担う極楽往生の引導者という性格は不動明王と同じく毘沙門天にも認められるもので、奥健夫は毘沙門天が魔障を払い(『拾遺往生伝』巻上25「沙門長慶」)、臨終に際して極楽へ導く存在(『拾遺往生伝』巻下5

「大法師順源」であることを指摘している。高橋沙矢佳は、不動明王と同じく毘沙門天が真言行者を護る存在であったとし（『多聞天陀羅尼儀軌』）、やはり『拾遺往生伝』『大法師順源』等に認められる往生伝の記述から、極楽への導き手としても信仰されるようになったことを論じ、さらに三善為康（1049～1139）撰『後拾遺往生伝』巻上9「大和国鳴河寺経助上人」の記事に、上人の入滅に際して毘沙門天と不動明王が前後に立って極楽へ導いたとあることから、この二尊が極楽往生への導き手として理解されていたことを論証している¹³。

毘沙門天については、不動明王ほどには往生に際してその役割を強調する記録や記事は見つからないものの、法華経との結びつき、すなわち『法華経』「陀羅尼品」に薬王菩薩・勇施菩薩・持国天・十羅刹女とともに法華経持者の法師を擁護することが説かれていることから、法華経信仰との関わりが深い尊格であると考えられる¹⁴。『法華験記』に法華経持者の若い僧侶が毘沙門天によって鬼から救われる説話があることはよく知られており（巻中57「遁鬼害持経者法師」）¹⁵、12世紀に成立した『今昔物語集』では、性空上人（910～1007）のもとに毘沙門天の眷属が童子として遣わされるエピソードが載せられており（本朝仏法部巻12「書写山性空聖人語」）、ここでも上人が熱心な法華経持者であることが繰り返し語られている¹⁶。12世紀末の作である辟邪絵（奈良国立博物館）に描かれる毘沙門天は、法華経を読誦する僧侶の前に立って弓矢で邪気を追い払う姿にあらわされており（挿図2）、『法華験記』に語られるような法華経持者を擁護する毘沙門天というイメージは、平安時代半ばから末期頃には認識されていたものと考えられる¹⁷。さらに『法華験記』には、横川の恵心僧都源信（942～1017）が『往生要集』を撰した際に、観音とともに天蓋を捧げる毘沙門天が現れたという話が載せられるが、併せて源信が熱心な法華経持者であり、極楽往生を願って遷化したことが語られている（巻下83「楞嚴院源信僧都」）¹⁸。このような記述を踏まえると、そもそも毘沙門天が担って

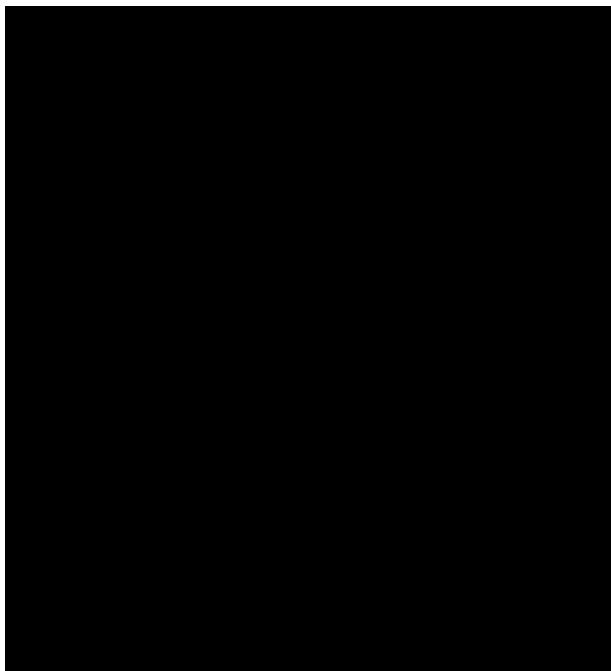


挿図 2 奈良国立博物館 辟邪絵（毘沙門天）

いた法華經持者の擁護という性格に対して魔障の退散という役割が期待され、次第に臨終に際して往生者の守護という尊格へと変遷していったとも仮定できるのではないだろうか。

三.

はなはだ雑駁ではあるが先行研究を踏まえて往生伝の記述を検討し、不動・毘沙門天の二尊に賦された、往生者との臨終に際して期待されていた役割のなかに法華經信仰との結びつきがあった可能性を想定した。ただし、法華經持者の擁護という役割から極楽往生の引導者へと展開するという単純な構図ではなく、もともと横川・楞嚴院の脇侍として信仰されてきた二尊に、様々な性格や役割が付与されるなかで次第に形成された、尊格としての多層的な機能のひとつであると考え、そもそもこの二尊が天台教団を中心とした信仰から生まれ、その周辺で受容されたことを踏まえ



挿図 3 国玉神社 銅板法華経・経宮（阿弥陀三尊像）

ば、法華経や往生思想との結びつきは自明のこととも言えるかもしれない。ただ、宮本の研究にあるように脇侍像としての不動・毘沙門天という組合せは作例として多様な展開を見せており、包括的に「天台の脇侍」として解釈するにとどまらず、個別的な事例を取り上げて検証する必要があるであろう。最後に、具体的な作例を取り上げながら不動・毘沙門天の脇侍としての展開における法華経信仰や往生思想との関わりを検討していきたい。

法華経信仰との関わりで作例として注目したいのが、大分・国玉神社に伝わる銅板法華経・銅宮である。大永7年（1527）、山岳信仰の霊地として知られる救菩提山において発見されたもので、奥書や銘から頼厳なる人



挿図 4 国玉神社 銅板法華経・経宮（毘沙門天像）

物を大勧進として康治元年（1142）9月24日に書写されたことが判明している¹⁹。法華経及び般若心経が刻まれた33枚の銅板が納められた銅筥には、正面に説法印を結んだ阿弥陀如来と観音・勢至の三尊像が、左側面に絹索と宝剣を執って結跏趺坐する不動明王、右側面には宝塔と宝棒を執る毘沙門天坐像が細い刻線であらわされている（挿図3～5）。背面には二軀の如来坐像が描かれており、向って右は説法印を結ぶ釈迦如来と考えられるが、左は多宝如来あるいは薬師如来、弥勒如来とするなど解釈が分かれている²⁰。説法印を結ぶ阿弥陀如来を中心とし不動・毘沙門天を脇侍としてあらわす尊像構成は、先述した安楽寿院本に通じるものであり、埋納経

不動明王と毘沙門天を脇侍とする尊像構成について



挿図5 国玉神社 銅板法華経・経宮（不動明王像）

という点からも往生思想との関わりが想定でき、さらに法華経そのものを納入した宮にこのような図像が採用されている点が興味深い²¹。名称の定まらない尊格の問題はあるものの、経宮にあらわされた不動明王と毘沙門天が往生に際しての魔障を払う役割あるいはその守護として配された可能性は高く、かつ、その制作背景に法華経信仰を見出すことができる。

阿弥陀如来像を中尊として不動・毘沙門をしたがえる尊像構成の作例で、制作年代が判明する早い時期の彫刻の遺品が、栃木・住林寺の諸像である（挿図6～8）。阿弥陀如来坐像の背面墨書から寿永3年（1184）に下野国の御家人、小野寺義寛を願主として造像されたことが判明してい



挿図 6 住林寺 阿弥陀如来坐像

る²²。中尊は来迎印を結んで結跏趺坐する阿弥陀如来坐像，脇侍は聖観音立像と地蔵菩薩立像で，同墨書銘から，この三尊が当初より一具として制作されたことがわかる²³。不動明王立像・毘沙門天立像については銘記に登場しないため，制作年代には検討の余地が残るものの，像の構造や様式から阿弥陀三尊像と一具として制作されたものと見られている²⁴。銘文にある通り，本像は小野寺義寛が 61 歳の時に発願したものであるが，注目すべきはその冒頭に「現世安穩 後世善処」と記される点である。字義通りに解釈すれば現世を安穩に暮らし，後世には善い場所に生まれ変わることを願った文であるが，これは『法華經』巻第 3「薬草喻品」中の文言であり，すなわち法華經信仰に基づいた祈念を示すものと言える²⁵。阿弥陀如来像を中尊とすることからも，また後述する銘文の文言からも，造像の大きな目的は極楽往生を願うものであったと考えられるが，像主である小野寺義寛が法華經信仰を持っていた可能性は高いだろう。また，同銘文の終わりには「令終決定生極楽 面奉弥陀種覺尊」という文言が見えるが，これは天台宗で修される法要の手順を説く『例時作法』に見出すことがで



挿図 7 住林寺 不動明王立像

きる²⁶。『例時作法』は五台山で行われていた念仏三昧法を円仁が唐から伝えて、後に叡山東塔常行三昧院で修したというもので、阿弥陀經の読誦を中心とした行の作法である。本書の成立過程には不明な点もあるが、円仁伝来の重要な常行三昧として天台宗において現在まで修されている。阿弥陀如来に不動・毘沙門がしたがう形式について、前述したように宮本忠雄は天台浄土教との結びつきを想定しており、銘文の文言からも住林寺像の制作背景にそのような思想があった可能性は十分に考えられるだろう。この点については、今後、当時の御家人の信仰や天台浄土教の展開などを



挿図 8 住林寺 毘沙門天立像

含めて検討していきたい。

阿弥陀如来を中尊として不動明王・毘沙門天を脇侍とする彫刻の作例は、住林寺像の後には文治2年（1186）の静岡・願成就院諸像や文治5年（1189）の神奈川・浄楽寺諸像が造像されるが、いずれも東国において御家人を願主とする点でも住林寺像と共通している。願成就院諸像や浄楽寺諸像にはいずれも納入品が認められ、その信仰背景を単純に理解することは難しいが²⁷、本稿で検討したような脇侍像に関する理解や、救菩提山出土の経筥や住林寺像など、阿弥陀如来を本尊として不動明王と毘沙門天を脇侍とする諸作例についての考察を踏まえれば、より具体的にその信仰の

ありようや制作背景を考証することができるのではないだろうか。

注

- ¹ 宮本忠雄「不動・毘沙門を脇侍とする尊像構成」『天台美術の形成と系譜に関する総合的研究—京滋における天台寺院の調査—（代表者：清水善三）』1978年。
- ² 良源が不動明王像を祀った可能性が高いことが史料から指摘されている。鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について—不動・毘沙門研究序説—」『佛教藝術』149, 1983年7月。
- ³ ただし現本尊は12世紀後半の再興像とみられ、焼失した両脇侍像は鎌倉時代の別作だったとされる。井上正「横川中堂の聖観音像」『日本美術工芸』423, 1973年12月。
- ⁴ 前掲註1, 宮本論文。
- ⁵ 浜名徳順は、千葉県内の作例を検討しながら不動明王・毘沙門天にそれぞれ胎藏界・金剛界を代表させ、大曼荼羅とする説を挙げている。浜名徳順「不動明王・毘沙門天を一对で祀る安置法について—その由来と房総における展開—」『房総の神と仏』千葉市美術館, 1999年。
- ⁶ 泉武夫「安楽寿院蔵阿弥陀聖衆来迎図について—その古様な図様と作風—」『学叢』8, 京都国立博物館, 1986年3月, のち『仏画の造形』（吉川弘文館, 1995年）所収。同「解説 阿弥陀聖衆来迎図」『王朝の仏画と儀礼』京都国立博物館, 1998年。
- ⁷ 奥健夫「総持寺蔵 木造不動明王立像」『國華 特輯 上野の佛像』1393号, 2011年11月。高橋沙矢佳「東国所在の運慶の造像の研究—静岡・願成就院諸像を中心に—」『鹿島美術研究（年報第29号別冊）』鹿島美術財団, 2012年11月。高橋沙矢佳「静岡・願成就院の諸像について—鎌倉時代初期の武士の信仰と造像—」『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』竹林舎, 2012年。
- ⁸ 前掲註7。
- ⁹ 「梵釈寺十禪師兼算。性好布施。心少瞋恚。自少年時念弥陀仏。帰不動尊。往年夢。有人告曰。汝是前生帰弥陀仏一逆人也。兼算臥病辛苦。七日之後忽然起居。心神明了。語弟子僧曰。我命將終。空中有微細伎樂。諸人聞不。便与諸弟子一心念仏。少而又臥。口不廢念仏。手不乱定印而入滅矣」井上光貞・大曾根章介校注『続・日本仏教の思想 1 往生伝 法華驗記（日本思想体系新装版）』岩波書店, 1995年, 505頁（以下、『往生伝 法華驗記』）。
- ¹⁰ 「良運阿闍梨 寛弘八年正月廿三日
生年七十二 毎日所作多年不退, 是精進之人也, 計自生日, 配若干日, 修不動供養法, 近于臨終修種々善, 生前所用三宝物, 皆悉償之, 病中有人夢云, 可生極樂, 死後有人夢云, 可生兜率」平林盛徳「資料紹介 楞嚴院

- 廿五三昧結衆過去帳』『書陵部紀要』37, 1986年2月。「過去帳」は源信および弟子の覚超が執筆し、その後も書き継がれたと考えられる。斎木涼子「解説 楞嚴院二十五三昧過去帳』『源信展』奈良国立博物館, 2017年。
- 11 「沙門昇蓮撰三井往生伝云、大僧正法務増誉者俗号一乗寺、(中略)如斯驗異其数甚多、行法之終必礼唱云南无大聖不動明王臨終正念往生極楽、永久四年二月十九日、坐諸尊前殊礼明王弥陀之二像、慧心不乱向西遷化、春秋八十五』『日本大藏經』95, 614-615頁。「三井寺往生伝」は建保五年(1217)の成立と考えられる。田嶋一夫「中世往生伝研究—往生伝の諸相と作品構造—』『国文学研究資料館紀要』11, 1985年3月。
- 12 「沙門長円天台僧、筑紫之人矣、少年入法家、誦誦法華經、兼又奉仕不動明王、修行累徳、(中略)如是奇異其数又多、豈非妙法威神、明王加護哉、誰於此經有生疑不信者、長久年中去世矣』『往生伝 法華驗記』, 554頁。
- 13 前掲註7。
- 14 「爾時毘沙門天王護世者白仏言、世尊、我亦爲愍念衆生擁護此法師故、說是陀羅尼、即說呪曰、阿梨那梨菴那梨阿那廬那履拘那履、世尊以是神呪擁護法師、我亦自當擁護持是經者、令百由旬内無諸衰患』『大正大藏』9, 59a。橋本章彦『毘沙門天—日本の展開の諸相—』岩田書院, 2008年など。
- 15 「但馬国有一小寺、建立以後逮百余歳、鬼神來往、(中略)交仏像中、抱一仏腰、誦經念仏、求遁死方、鬼食老僧畢、尋來持經者在所、沙門一心念法華、鬼顛落仏壇前、其後鬼不來、沙門弥抱仏腰、誦法花經、待夜早明、至明旦見之、所抱仏者毘沙門天王、見壇前牛頭鬼三段切殺、天王所持鋒劍赤血塗付、明知爲助法花經持者、多聞天王殺伏牛頭鬼也』『往生伝 法華驗記』, 538頁。宮島新一「辟邪絵—わが国における受容—』『美術研究』331, 1985年3月。
- 16 「今昔、播磨ノ国ニ、飾磨ノ郡、書写ノ山ト云所ニ、性空聖人ト云フ人有ケリ、本、京ノ人也、(中略)聖人ノ云ク、「我レ心ニ叶テ輒ク被仕ル、者ノ無ケレバ、毘沙門天ニ、「然ラム者、一人給ヘ」ト申シ、ニ依テ、実ノ人ヲバ不給デ、眷属ヲ給ヘル也、(中略)死ヌル時ニハ、室ニ入テ、静ニ法花經ヲ誦シテゾ入滅シケル』『新日本古典文学大系 35 今昔物語集 3』岩波書店, 1993年, 170-177頁。『今昔物語集』における法華經信仰と毘沙門天との関わりについては前掲註14、橋本著書。
- 17 前掲註15、宮島論文、中島博「解説 辟邪絵 毘沙門天』『聖と隠者—山水に心を澄ます人々—』奈良国立博物館, 1999年。
- 18 「源信僧都、(中略)撰往生要集、示極楽之指南、施菩提之資糧、其時夢告言、觀世音微咲、授金蓮華、毘沙門捧蓋坐立侍、況利生巧智、仏法方便、難思議也、(中略)今有二天童子而來下言、我兜率天弥勒菩薩使者也、聖人偏持法華經、深解一乘理、以是功德当生兜率』『往生伝 法華驗記』, 549-550頁。
- 19 市場直次郎「求菩提山銅板法華經図像私考』『考古学雑誌』40卷3号, 1954年

不動明王と毘沙門天を脇侍とする尊像構成について

12 月.

- ²⁰ 釈迦・多宝として『法華経』『見宝塔品』をあらわす、持物を薬壺とみて薬師如来とする、弥勒として三世仏をあらわすといった見解がある。井形進「解説 銅板法華経・銅宮」『福岡の神仏の世界—九州北部に花開いた信仰と造形—』九州歴史資料館、2014 年。末吉武史「解説 銅板法華経・銅宮」『浄土九州 九州の浄土教美術』福岡市博物館、2018 年など。
- ²¹ 坐像と立像との違いはあるものの、不動・毘沙門天の持物は国玉神社銅宮と安楽寿院本とで共通している。また、持物が失われているものの後述する住林寺像も手勢は一致している。
- ²² 北口英雄「寿永三年在銘の阿弥陀如来坐像及びその随時像について」『MUSEUM』394, 1984 年 1 月。北口英雄「木造阿弥陀三尊像と不動明王・毘沙門天像」『國華 特輯 下野の仏像』1339, 2007 年 5 月。
- ²³ 阿弥陀如来坐像背面墨書「現世安穩 後世善處／敬白／奉造^立 金色等身阿弥陀仏像一軀／奉造^立 三尺觀世□（音）并 像一軀／奉造^立 三尺地藏并 □（像）一軀／右壽永二年癸卯歲八月十日壬寅日山入木□（切）十二日□（甲）辰日造始之／同三年春木造了同年四月之頃漆□（ス）也□又堂財木目去々年／取始今年二月十一日庚午日柱立同十二日辛未日棟上也僧義寛／春秋六十一綱企□（處）也芳縁藤原氏同心合力結構也願以此功德／過去二親藤原氏^之 過去二親令成仏得道矣次壇主等現悉四生悉□／令成就耳乃至手足結縁之輩等令蒙利益□□（敬）白／壽永三年五月廿四日／□□地主大法師義寛 芳縁藤原氏乙娘□／一子嫡男藤□（原）道綱／足利家綱／令終決定生極樂 面奉弥陀種覺尊」前掲註 22, 北口論考。
- ²⁴ 像高は阿弥陀 86.7 cm, 観音 106.0 cm, 地藏 98.0 cm, 不動 97.3 cm, 毘沙門天 97.0 cm。詳細は前掲註 22, 北口論考。
- ²⁵ 「爾時無數千萬億種衆生。來至仏所而聽法。如來于時觀是衆生諸根利鈍精進懈怠。隨其所堪而為說法。種種無量。皆令歡喜快得善利。是諸衆生聞是法已。現世安穩後生善處。以道受樂亦得聞法」『大正大藏』9, 19b。
- ²⁶ 「次廻向 調声立正面。衆立座前。調声先誦。衆取次第 吾等所修念仏善 廻向極樂弥陀仏（中略）十方施主除災患 念仏大衆成悉地 命終決定生極樂 面奉弥陀種覺尊 菩提行願不退転 引導三有及法界 同一性故證菩提」『大正大藏』77, 271c。
- ²⁷ 高橋沙矢佳は、願成就院諸像の納入品についても検討を加え、本像に陀羅尼による滅罪と極樂往生への祈りという北条時政の願いが込められたものであることを指摘している。前掲註 7, 高橋論考。

【挿図の出典】

挿図 1. 『王朝の仏画と儀礼 善をつくし 美をつくす』京都国立博物館、1998 年

挿図 2. 『聖と隠者 山水に心を澄ます人々』 奈良国立博物館, 1999 年

挿図 3～5. 『未来への贈りもの 中国泰山石経と浄土教美術』 九州国立博物館,
2007 年

挿図 6～8. 北口英雄「寿永三年在銘の阿弥陀如来坐像及びその随時像について」
『MUSEUM』 394, 1984 年 1 月